

[島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要 Vol. 48 37~45 (2010)]

# ラフカディオ・ハーンの文化資源的活用に関する実践報告

小 泉 凡  
(総合文化学科)

Lafcadio Hearn as a Cultural Resource

Bon Koizumi

キーワード：文化資源 cultural resource ラフカディオ・ハーン Lafcadio Hearn  
ゴーストツアー ghost tour  
着地型観光 sightseeing style using travel plans produced by local groups

## 1. はじめに

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲/1850-1904）については、すでに英米文学・比較文学・比較文化・民俗学等の分野から多様な研究が行われ、また書簡や直筆原稿等の一次資料の翻刻出版もかなり進みつつある現状である。

一方で、近年、現代社会の文脈でハーンの事績を再評価し、社会的に活用しようとする試みが国内外でみられるようになってきている。たとえば、作品「生き神」（"A Living God", 1896）は、機転の利く庄屋濱口梧陵が津波から人々を救ったという実話に基づくものだが、スマトラ沖地震の発生（2004年12月）や国連防災世界会議の開催（2005年1月、神戸市）以降、防災教材としてにわかに再評価され始めた。2003年に財団法人日本気象協会により制作された各自治体配布用の防災ビデオ「20世紀日本の地震災害」にこの作品が活用されたのを始め、インド・ネパール・バングラデシュ・インドネシア・マレーシア・フィリピンなどアジア諸国では「生き神」の翻訳とその活用が急速に進んだ。他にも、クロアチアのヴァイオリニストで日本文学研究家のミルナ・ポトコワツ・エンドリゲッティ氏はコンサートで来日した折

にこの作品に接し、共感してクロアチア語訳を自費出版し、防災教材として小学生に配布した。さらに2009年1月にはアメリカの童話作家キミコ・カジカワ氏が新たに「生き神」を再話し、*Tsunami*と題する絵本として出版している。

また、文化資源、観光資源としてハーンを社会的に活用しようとする動きもみられる。松江市では、従来から観光文化振興の一環としてハーンが活用されてきたが、本稿ではその中でも注目すべき事例として、筆者が発案から実施まで深く関わった「松江ゴーストツアー」についての実践報告を行う。また、2009年10月にギリシャ・アテネのアメリカン・カレッジで行われた、芸術でハーンの世界を表現しようという新しい試み"Tribute to Lafcadio Hearn"（「ラフカディオ・ハーンへの贈り物」）という事例についても若干の言及を行う。

そして本稿では、これらの事例を、ラフカディオ・ハーンの文化資源的活用として位置づけてみたい。「文化資源」とは、文化財を含む地域文化の総体を指すが、とくに未評価の文化を観光や地域振興、まちづくりなど社会的活用の方向性をもった文脈で位置づける際に使用する新しい概念である。「文化資

源」という言葉は、2000年に東京大学大学院に文化資源学専攻が設置されたことに端を発し、しだいに普及していった。同専攻では、多様な観点から新たな情報を取り出し、社会に還元する方法を研究することを目的としている。2002年には、多くの死蔵され、消費され、活用されないまま忘れられていく資料を、新たな文化を育む土壌として資源化し活用可能にすることを目的として、文化資源学会も設立された。<sup>1)</sup>

本学でも2007年の再編統合により、地域の未評価の文化に光をあてる目的で総合文化学科に文化資源学系が設置された。その意味でも、ラフカディオ・ハーンという人間やその事績を「文化資源」という新しい切り口から見直したいという願いを込めた報告である。

## 2. 松江ゴーストツアー

### 1) 誕生の背景

2005年8月、筆者が事務局をつとめている山陰日本アイルランド協会の有志メンバーと10日間にわたって「伝統音楽」をテーマとしたアイルランドの旅を行った。その際、最後に立ち寄った首都のダブリンで、市内を走っていたボディー全体をお化けのイラストでラッピングしてある二階建てバスがひときわ目をひいた。ダブリンは6回目の訪問だったが、はじめてその存在に気づいたのだった。さっそくこの「ゴーストバス」を運行しているダブリン市交通局に問い合わせると、毎日午後8時に交通局前を出発し、2時間かけてガイドの話を聞きながら怪談スポットを巡るバスツアー専用の車輛だという。さっそくチケットを求めに交通局の本社に出かけたが、すでに今晩は満席だと断られ、明朝、再度足を運び、ようやく20ユーロのチケットを手に入れた。大変人気のツアーで、チケットは当日の午前中までに売り切れることが多いという。

実際参加してみると、ガイドは黒い衣装に身を包んだプロの語り部で、むしろ俳優というべき存在だった。バスの内部も、黒いカーテンが設置され、それを引けば一瞬にして劇場に早変わりする特別仕様となっていた。語り部の魅力的な話に耳を傾けながら、

時々スポットで下車をする。あの『ドラキュラ』を書いたブラム・ストーカーが住んでいたアパートメントや怪談のまつわる数か所の墓地で下車して話を聞く。実に興奮し、あっという間の2時間だった。世界中の観光客が恐怖と驚きと喜びで、心をときめかせていたその表情が忘れられなかった。



写真1 ダブリンのゴーストバス

帰国後、松江でも「ゴーストバス」によるツアーを実践してみたいという思いに駆られた。松江は城下町ということもあり、築城にまつわる人柱伝説や城下の周縁部には普門院の橋姫伝説、大雄寺の子育て幽霊譚、清光院の遊女松風の怨霊譚、月照寺の大亀の碑が市中を歩くといった都市伝説など、多くの怪異譚に恵まれている。それに加え、ハーンが『知られぬ日本の面影』(Glimpses of Unfamiliar Japan, 1894) にその多くの怪談を紹介したことから、ダブリンに劣らぬ怪異・文学の資源が存在する町といえるのだ。また、夜間を利用したツアーはまだ日本では馴染みがないことから、斬新なナイトツアーという面での期待感もあった。

その年から小泉八雲記念館の管理・運営を行うことになったNPO法人松江ツーリズム研究会(山本素久理事長)に相談を持ちかけ、2006年8月7日に松江ではじめて「ゴーストバス」を実施した。バスの定員を上回る参加希望者があり、満席に達した時点で申し込みを締め切ることになった。松江市交通局からレークラインバスを借り上げ、ハーンが作品の中に取り上げた怪異譚にまつわる普門院、春日神社、月照寺、大雄寺の4つのスポットを、筆者が解説しながら巡るという内容だ。黒づくめの衣装は持ち合わせなかったため、ハーンの扮装でガイドを行った。

レークラインバスの着席定員の限界と冷房の不具合を除けば、参加者の評判もまずまずで日本でもゴーストバスの可能性が期待できることを実感した。

## 2) 実施までの経緯

2008年、再度NPO法人松江ツーリズム研究会に協力する形で、ゴーストバスの本格的な商品化をめざすことにした。さっそく同研究会が平成20年度の国土交通省ニューツーリズム創出・流通促進事業に「松江ゴーストツアー」という名称で企画案を提出したところ、島根県から唯一採択され、ユニークな着地型ツアーとして期待されることとなった。しかし、実施までには多くの解決すべき問題が存在した。

主として移動手段とガイド養成の問題である。「ゴーストバス」とした場合、そのつど、バスを借り上げる必要があり、コストがかかる割には、普通の路線バスや観光バスの車輛では、ダブリンのゴーストバスのようなインパクトや魅力を参加者に与えることができない。また、松江城下は徒歩で移動できる広さであり、海外でも多くの都市に徒歩によるゴーストツアーが存在することも考え、「松江ゴーストツアー」は、まずは徒歩ツアーとして始めることとした。さらにコースについても検討し、結局、松江城の二の丸広場を起点とし、ギリギリ井戸（井戸の由来と人柱伝説）、城山稲荷神社（ハーンの稲荷信仰への関心、狐穴）、志賀直哉文学碑（白樺派とハーン）、四十間堀（小泉セツが伝承する世間話）、月照寺（大亀の碑をめぐる都市伝説）、清光院（遊女松風の怨霊譚）、大雄寺（子育て幽霊譚）の順で巡ることとした。そして、最後の訪問地、大雄寺から起点の松江城まではチャーターしたタクシーで参加者を送ることになった。

最も大きな問題はガイド養成だった。この種のツアーは、ガイドの魅力に負うところが大きい。そのためは、質の高いガイドが要求されるのである。そこで、まずは新聞で公募を行い、観光ボランティアガイド組織にも声をかけて希望者を募集し、2008年7月末に面接を行った。そして面接にパスした24名のガイドに、早速、講習を開始した。まずは、座学による講習で、「小泉八雲」「松江の郷土史」「口

承文芸」という3つの観点から専門家が講義を行った。さらに、日を改めて実地研修を行い、3人の講師が、ゴーストツアーで訪問する場所ごとに、語るべき内容を整理してガイドに伝えた。その後、数回にわたって、ガイドは自主的に模擬ツアーを実施し練習を重ねた。さらに、元アナウンサーだったプロの語り部を講師に迎え、徹底的に語りの訓練も行った。こうして極めて限られた準備期間の中でガイド養成を行い、ツアー実施日直前に松江ゴーストツアーの専門ガイドが誕生した。

まずは国土交通省の補助を得て、2008年8月23日から11月末までに11回のモニターツアーを実施することになった。また、それに先立って「カラコロコース」と「へるんコース」の2コースが設定された。前者は徒歩ツアーのみ参加のコースで料金は1,500円、後者は料亭「蓬萊荘」で筆者の講演「小泉八雲～異界への旅」を聴き、松江の郷土料理を楽しんだ後、徒歩ツアーに参加するというもので、5,800円である。

また「松江ゴーストツアー」のポリシーとして豊かな遊び心、闇を歩く、語りに耳を澄ます、歴史や文学の知識を持ち帰る、という4点を掲げることにした。参加者には、しっかりと五感を開き、とくに聴覚を研ぎ澄ませて語りを楽しんでもいただく。月照寺の境内で体験できる闇の中のウォーキングからは、闇や自然を畏怖する感覚を思い出すこともできる。何となくホラーでスピリチュアルな雰囲気浸るだけではなく、しっかりと松江の歴史やハーン文学についての知識も持ち帰っていただく。そのような欲張った願望で参加者の「遊び心」と「知的好奇心」の双方を満足させることを意図して実施に踏み切った。

## 3) アンケート結果から

初回ツアーには30名（県内25名・県外5名）の参加があり、県外の参加者の中には沖縄・東京など遠隔地からの参加もみられた。初回は「カラコロコース」「へるんコース」両方を実施し、筆者も「へるんコース」の講演だけではなく、徒歩ツアーでもガイドと役割分担をして案内にあたった。11回のモニ

ターツアーでは、終了後に参加者全員にアンケートを実施した。全体的には、「想像以上に面白かった」「松江に住んでいながら知らないことがほとんどだったので新鮮だった」「怖さだけではなく八雲文学の奥深さが理解できた」など、モニターツアーは概して好評を得たといえる。しかし、以下のような厳しい意見もみられた。

- ・説明が長すぎる、もう少しポイントを絞った説明にして欲しい。
- ・語り部さんの音声が大き過ぎて興奮めした。
- ・朗読があまりにも棒読み。朗読の向上を望む。
- ・原稿に書いたものを読まないで欲しい。
- ・語り部の話が拙過ぎる。
- ・解説よりもっと怪談を語ってもらった方が、怖さも倍増して楽しかったのではないかな。

予想通り、批判的意見の大半はガイドの経験不足や語りの拙さを指摘するものだった。また、「遊び心」を演出する努力が足りないことも指摘された。

さっそくこの結果を参加者にフィードバックするため、アンケート結果をガイドにも伝え、まずは各自で語りや案内に一層の研鑽を積むこととした。また、遊び心の演出については、月照寺・清光院の2か所で、効果音・幽霊に扮装したスタッフの配置などを次回から実施することとした。モニターツアー終了後の12月には、ただちにガイドの再研修を実施した。研修によるマニュアル化はガイドの個性を潰すという批判も承知しているが<sup>2)</sup>、ガイドの個性表現は最低限の松江ゴーストツアーという商品の品質を参加者に保証した上で行われるべきものだと考えた。けっきょく松江ゴーストツアーは、好評により、冬期も、また2009年度も継続して行われることになった。

2009年に入ると、マスコミ・口コミ双方の影響で、注目を集めるようになった。『山陰経済ウイークリー』（2009年5月26日 6月1日号）では第三種旅行業者が苦戦を強いられる中で、松江ゴーストツアーなどの魅力的商品には大手旅行会社も関心を示している旨が報道された。また、『日本海新聞』（2009年7月24日付）には「知的！文学的！語り拔群！」という大きな見出しで、松江の魅力がよくわかる地元ブ

ロデュースによる着地型観光として松江ゴーストツアーが紹介された。ガイドの技能も大幅に向上し、ようやく主催者側の意図が参加者側にも伝わり始めたことを実感した。また、評判となったガイドには指名もくるようになり、ガイドの個性が魅力を発揮し始める段階にまで到達したようだ。



写真2 松江ゴーストツアーの実施風景

観光を通じた地域活性化をめざす国土交通省（担当は観光庁観光産業科）は、2009年3月19日に「地域が提案する魅力ある旅行商品説明会」を東京で実施し、全国から注目される事例13件に関わった関係者がプレゼンテーションを行った。松江ゴーストツアーも13事例の中に選ばれ、NPO法人松江ツーリズム研究会の高橋保氏（元近畿日本ツーリスト山陰支店長）がプレゼンテーションを行った。高橋氏によれば、国土交通省の担当者は、松江ゴーストツアーは、画期的内容による話題性・集客力・継続性という面から、13例の中でとりわけ秀逸であると高い評価と期待を寄せたという。2009年秋には徳島の地元団体から視察希望の申込みが寄せられており、また、JTBは2009年11月から翌年3月までの冬季間に松江ゴーストツアーを組み込んだ旅行商品売り出すことを決定している。

2008年8月23日の初回から2009年10月末までの実施回数は49回、参加者数は951名を数え（表1参照）、そのうち県外からの参加者は平均で全体の約35%を占めた。2009年度に入ると県外からの参加者の比率が次第に大きくなり、同年7・8月の2か月に限ってみれば、県外者が62%を占め、広い範囲で認知度が高まっていることがわかる。同じ2ヶ月間のデータでは年齢層は20代、30代が全体の約24%と最も高



表1 ゴーストツアー集客表

年 度	実施月	回 数	人 員
H20年度	8月	3	107
	9月	3	105
	10月	3	58
	11月	3	93
	12月	1	9
	1月	0	0
	2月	1	19
	3月	5	75
H20年度計		19	466
H21年度	4月	3	38
	5月	5	56
	6月	3	42
	7月	3	54
	8月	9	181
	9月	4	70
	10月	3	44
H21年度計		30	485
総合計		49	951

表2 参加者の居住地・性別・年齢層・情報源 (2009. 7 - 8月)

居住地	島根県内	37
	中国	23
	四国	0
	近畿	7
	関東	27
	東海	0
	北陸	0
	東北	0
	北海道	0
	九州	3
計		97
性 別	男	39
	女	58
	計	97
年齢層	20歳未満	7
	20代	23
	30代	23
	40代	17
	50代	14
	60代以上	13
	計	97
情報源	インターネット	22
	新聞	6
	雑誌	3
	テレビ・ラジオ	2
	チラシ	15
	知人・友人	9
	旅行会社	2
	その他	6

く、男女別では女性が59.8%で男性を上回っているのは、後に記すニューオリンズのゴーストツアーの参加者と同じ傾向を示している。(表2 参照)

#### 4) ニューオリンズのゴーストツアー

松江ゴーストツアーはひとまず安定したプランとして定着したが、いっそうの魅力づくりを絶えず継続していく必要がある。そこで、筆者は2009年3月末、松江同様にハーンのゆかりの地であり、かつロンドンと並んでゴーストツアーのメッカとされている米国ルイジアナ州のニューオリンズに視察に出かけた。ニューオリンズでは複数の旅行会社が、ガイドが徒歩で案内するゴーストツアーを実施しており、それも各社が複数の異なるメニューをもっている。『地球の歩き方～アメリカ南部～'08-'09』でも、ゴーストツアーを中心としたニューオリンズの徒歩ツアーについて2頁をさいて、かなり詳細に記述している。基本的にニューオリンズでのゴーストツアーのメニューは以下に示す3種である。

フレンチクォーター・ゴーストツアー：奴隷制時代に残酷な扱いを受けた奴隷たちの怨霊が出没するといわれる場所を、怪談を聴きながら巡るツアー。とくにハーンとも親交があった作家ジョージ・ワシントン・ケーブルの『ルイジアナの不思議な実話』に詳述されている、デルフィーヌ・ラローリー家の怨霊譚が目玉となる。フレンチクォーターとは18世紀の町並みが残るダウントアウンの風致地区の呼称。なお、このツアーは夜間に実施される。類似したものに、郊外の高級住宅街に伝わる怪談スポットを巡るガーデン・ディストリクト・ゴーストツアーもある。

墓場ツアー：洪水が頻発するニューオリンズならではの大型の墓石が密集するセント・ルイス墓地を訪ねる。とくにアフリカ起源の呪術とカトリックが融合し成立したニューオリンズ独特のヴードゥー教に関する話を聞き、ヴードゥー・クイーンと呼ばれたマリー・ラボーの墓訪問が目玉となるツアー。1877年～1887年まで同地で記者をしていたラフカディオ・ハーンも、幾度となくマリー・ラボーを訪ね、ヴードゥーの俗信やニューオリンズの怪談を採集している。なお、このツアーは日中実施される。

ヴァンパイア・ツアー：ニューオリンズで生まれ育った作家アン・ライスのヒット作『インタビュー・

ウィズ・ヴァンパイア』(Interview with the Vampire, 1976) が映画化された1994年以降、世界的な吸血鬼ブームが起こるが、それを契機に企画されたツアー。ダウントウンのいくつかの屋敷を訪ね、そこで起きたと伝えられる吸血鬼事件の話や吸血鬼の歴史を聞きながら、市内を歩く。このツアーは夜間に実施される。休憩地ではヴァンパイア・キス (Vampire Kiss) というカクテルも飲める。



写真3 ニューオリンズでゴーストツアーを実施する  
Haunted History Tours 社の看板

筆者はHaunted History Tours 社が主催するのツアーに参加したが、いずれも大盛況で、30名近い参加者がいた。ガイドの語りも実に個性があり、ニューオリンズの文化全般についての深い造詣を感じさせるものだった。のツアー・ガイドだったドッジ・レニア氏はゴーストツアーのガイド歴五年半といい、お墓保存協会の会員でもある。自ら、ニューオリンズのユニークな歴史・文化に関心がありこの仕事についたという。市観光局が行っているガイド養成で研修を受け、ライセンスを取得すれば、だれでもガイドになることができるが、ゴーストツアーのガイドはやはり怪談やヴードゥーの文化に関心がないとつとまらないという。とくに松江で実施したようなゴーストツアーに限定したガイド研修は行われていないが、先輩ガイドについてコースを巡り、

要領を見覚え、さらに自分の持ち味が出せるように努力を重ねるのだという。

アメリカの大手旅行会社グレイ・ライン社のニューオリンズ支社長ジム・フィエル氏によれば、ニューオリンズのゴーストツアーは15年ほど前から始まり、とくにここ2・3年は世界的なスピリチュアル・ブームの影響も受けて、20代から30代の女性の参加者が増加し、人気が高まっている。現在、ゴーストツアーは同支社の総収入の5%を占めるまでになり、社内でも重要度が高まっている。ハロウィーン当日など参加者の多い日には、実施回数を1回から4回に増やすなどフレキシブルな対応にも努力しているという。

翻って松江ゴーストツアーを眺めると、ツアーの質、ガイド養成の仕方についても決して劣るものではないという自信をもった。しかし、ニューオリンズではどのツアーも2時間でその間にパブやカフェなどふさわしい休憩場所があり、そこで15分程度休憩をとって参加者・ガイドともにリフレッシュする。このブレイクが参加者・主催者双方にとって効果的である。徒歩のみでも参加者の体力的負担が少なく、もっとも適切な距離と時間配分だと感じた。また、各社ともツアーの種類や出発時刻が選べ、Web上からの参加申し込みが簡単で、しかも割引されるように工夫されている。恵まれた文化資源に加えてゴーストツアー先進地としてのノウハウが生かされていることを学んだ。

ニューオリンズでゴーストツアーを実施している旅行会社では、とくに参加者の人数、居住地、性別、年齢などのデータを記録しておらず、正確な数字を知ることはできなかった。インタビューについても実施方法そのものが利益に直結するため、概して協力的とはいえなかった。しかし、所要時間、距離、経路、時間配分や中身のメリハリ、別メニューの検討、Webページの充実など、今後の松江ゴーストツアーの改善点も明確になり、非常に有意義な体験ができたと考えている。

##### 5) 注目される着地型観光

では、ゴーストツアーはニューツーリズムと総称

される現代の観光の潮流の中でどのような意味をもつのだろうか。ニューツーリズムとは、幅広い領域を対象としているが、「目的をもって地域に滞在しながら、地域との深い交流を実現できることが大きな特徴」<sup>3)</sup>となっている。

1960年代から80年代は一般にマスツーリズム（団体旅行）の時代といわれ、この時期には大都市（出発地）の旅行会社が出発から帰着までの企画、集客、案内をすべて行うのが一般的だった。90年代以降、オルタナティブ・ツーリズム（体験型の少人数旅行）に旅行形態が移行し、目的地での体験が重視されるようになると、次第に目的地（到着地）の地方自治体や団体などが企画した地域ならではのアイテムを取り入れた体験型の観光プランが注目されるようになった。そして、このような到着地に住む人々が地域に密着した視点で企画した観光プラン、つまり着地型観光プランが大手旅行会社の企画にも盛り込まれるようになっていった。

「着地型観光」という言葉は、2003、4年頃から地方自治体で使われるようになり、国土交通省も2005年に「着地型旅行商品」という言葉を報告書の中で使用している。日本における着地型観光は、1988年に作家太宰治の生誕地である津軽半島の青森県金木町で、任意団体「津軽地吹雪会」が雪原の中を馬纒に乗って名物の地吹雪を体験し、津軽鉄道のストーブ列車の中で地元の婦人が津軽弁でスルメと地酒をふるまうというツアーを企画したのが元祖だとされている。このツアーは、その後21年間今日まで継続しており、ハワイからのグループも参加するまでになっているという。<sup>4)</sup>

現在、着地型観光のプランは各地の自治体・団体・任意のグループなどが企画・実施し、旅行者や大手旅行業者の注目を集める一方で、国土交通省によれば持続困難なケースがその大半をしめるという。松江ゴーストツアーが評価されたのも、1年以上の持続性という理由に負うところが大きい。1992年の国連環境開発会議（通称「地球サミット」）でサステイナブル・ツーリズム（持続可能な観光）が話題となり、以後、急速にそのテーマに関心が寄せられるようになった。<sup>5)</sup>そして、この理念のもとに普及し

始めたのが今日話題となっているエコツーリズム、グリーンツーリズム、ヘリテージツーリズム、街並観光、産業観光、ヘルスツーリズムなど地域活性化につながるような体験交流型の着地型観光である。こういった持続性を維持するような観光、旅行者の求める新しい観光形態を意識した観光のあり方を総称して「ニューツーリズム」と呼んでいる。

着地型観光は単なる新しい観光形態というだけではなく、地域活性化やまちづくりの取り組みとしての要素を多分に孕んでいる。各地の住民が地域の文化を掘り起こし、それを文化資源として観光客・住民双方に魅力的だと感じさせるような表現の仕方をするにより、地域振興やまちづくりの起爆剤になることも十分にあり得る。しかし、そのためには、集客システム・広報宣伝・運営管理・事業経営など課題は多いとされている。

松江ゴーストツアーを主催しているNPO法人松江ツーリズム研究会では、最小催行人数の変更について検討を始めているという。それは参加者が地元から県外者にシフトするにつれ、1回のツアーの参加者数に減少する傾向がみられるからだ。2008年度の1回のツアーの平均参加者数は19名だったのに対し、2009年度は16名となっている。県外者の場合は、大半が事前申し込みを行っていることもあり、その点を配慮し最小催行人員を10名から5名に減らすことを検討している。しかし、たとえ1名でも実施することになると経営的には難しくなりそれこそ持続可能が困難となる。損失を出さずにしかも遠来の観光客の期待を裏切らないようにする、この微妙なバランスを維持することが目下の大きな課題となっている。いずれは、新しいコースを検討しメニューを増やしたり、ダブリンのようなゴーストバスを松江にも走らせることで、地域の魅力づくりに一層寄与することをめざしている。いずれにせよ、松江ゴーストツアーはニューツーリズムの流れを受け止めつつ、城下町松江に眠っていた無形の文化資源を発掘し、観光という方向性で光をあてたことに一定の意味があると考えている。

### 3. 芸術によるハーンの表現ーギリシャ・アメリカン・カレッジの事例ー

最後に直近の事例として、2009年10月13日にギリシャ・アテネのアメリカン・カレッジで実施された "Tribute to Lafcadio Hearn" (「ラフカディオ・ハーンへの贈り物」) という事業について若干の報告を行う。このイベントは、ハーンに関心をもつアート・コーディネーター、タキス・エフスタシウ氏が発案により、上記大学主催の事業として実施された。筆者も構想段階から関わり、実現に至るまで、主催者との間で種々の協力関係を維持してきた。

この事業は具体的には、3つの柱で構成されている。1つは、2009年がギリシャと日本の友好110周年の節目にあたることから、両国の文化交流の象徴である「ラフカディオ・ハーン」をテーマにした造形芸術を、Web上で世界のアーティストに呼びかけて集め、展示を行うことだ。この趣旨に賛同した47名のアーティストが絵画・彫刻・書道・映像などの芸術作品を寄せた。おもにギリシャを拠点として活躍する作家たちが中心だが、アメリカ・オランダ・イタリア・スペイン・バググラデシュ・日本で活動する作家たちも作品を寄贈した。そして、この47点の作品を10月13日から同大学のアートギャラリーで "The Open Mind of Lafcadio Hearn" (「ラフカディオ・ハーンの開かれた精神」) と題して約半年間の展示を行うことだ。2つ目は、この催しに企画段階から深く関与していたアーティストの一人で、福山生まれ、ニューヨークで活動する野田正明氏による、やはり "The Open Mind of Lafcadio Hearn" と題する4メートルのステンレス製モニュメントがキャンパス内に設置され、その开幕式を行うこと。3つ目は、同大学図書館内に、日本人及びギリシャ人の複数のハーン愛好家から寄贈されたハーンの初版本等の稀観本を展示する特別コーナーを設置することだ。

一連の事業が始まる10月13日には、野田正明氏制作のモニュメントの开幕式が行われ、続いて、図書館に会場を移して筆者とギリシャを代表するハーン研究者のクレア・パバブブロウ博士が講演を行った。オープニング・セレモニーには作品の制作者や内外

のハーン愛好者や一般のアテネ市民、アメリカン・カレッジの学生など約500名が集まった。翌14日には、日本文化紹介のイベントが開催され、松江市の中村茶舗の社長と同夫人によるティー・セレモニー、また日本画家和田清鳳氏による墨絵のワークショップも実施された。

筆者は、オープニング・セレモニー当日と翌日にアートギャラリーの展示会場を視察し、複数の制作者と話を交わす機会にも恵まれた。ハーンの商品中のテーマを絵画で表現したものあれば、ハーンの顔の輪郭にヒントを得て、ハーンの心を楕円の彫刻で表現したり、「チータ」(Chita, 1889) という作品から読み取れるメッセージを映像で表現したもの、ハーンが愛した「カルマ」(Karma) という言葉を出雲地方に因ませて「縁」という書で表現した作品など実に多様で斬新なものばかりだ。47点すべてに大いに心動かされたといっても過言ではない。

しかし、本稿では、上記の個々の芸術作品の詳細について解説することを目的としているわけではなく、芸術を通してハーンを表現することの文化資源学的意味とそれが文化振興へ連続する可能性を示すことにある。

今回の事業の意義はそのアイディアが極めて斬新であることだ。芸術を介して文筆家を表現すること自体、文学と芸術という異分野のコラボレーションであり、その意味では分野を超えた出会いの場を提供することとなり得た。また、「芸術」という媒体の性格上、関心をもつ人々の範囲が大きく広がるというメリットもみられた。将来的にこの展示が各地に移動することになれば、地域の芸術文化創造にも寄与し、作品から様々なハングッズが生まれることも予想され、文化・観光双方の視点から効果が期待できると思われる。このギリシャでの事業については機会をあらためて触れてみたいと考えている。

### 4. おわりに

本稿では主として、松江ゴーストツアーの実践報告を通して、「文化資源」という新しい切り口からみた、松江における「ラフカディオ・ハーン」の活用成果と可能性について言及した。松江ゴースト



ツアーについては、前述したように持続可能な事業として魅力づくりを続ける必要がある。それには、今後さらに海外の成功事例を視察しつつ、ゴーストツアーのメニューを増やすことも検討しなければならないだろう。井口貢によれば、持続可能な観光とは「常在観光」という言葉で言い換えることができるという。つまり、常在観光とは、「うちのまちには何も見るものがない」といった諦めの考えを捨て、常にある地域資源の価値を再認識してその磨き方、表現方法を発想して観光に結びつけることだ。<sup>6)</sup> 松江では筆者自身、「また小泉八雲？もうやり尽くしたでしょ！」という言葉を時々耳にするが、そういった閉塞感を捨て、常在の文化の表現方法を変え、それを資源化するアイデアを発想することが大切だといえよう。

ギリシャで行われた、アートによる「ハーンの世界」の表現についても、従来のハーンの研究、顕彰、啓蒙の方法では十分に達成し得なかった異分野間のコラボという文化の創造と普及の側面を実現することに成功している。

2010年は、ラフカディオ・ハーン生誕160年にあたり、また松江では来松120年という節目を迎えることになる。この時期に、文化資源としてのハーンの意味を再考し、「松江」という地域の文化観光振興に結び付くような実践のあり方をさらに模索する必要があると考えている。

#### 引用文献

- 1) 文化資源学会設立趣意書 (2002年 6 月12日採択)  
<http://www.1.u-tokyo.ac.jp/arc/overview/shuisho.html>
- 2) 玉置泰明「観光は持続可能かーリゾート開発から常在観光へー」(山下晋司編『観光文化学』、新曜社、東京、p.56、2007)
- 3) 古賀学「観光の新潮流とニューツーリズム」(『碧い風』64号、中国電力株式会社、pp.4-6、2008)
- 4) 尾家建生・金井萬造編著『これでわかる！着地型観光ー地域が主役のツーリズム』学芸出版社、京都、p.7(2008)
- 5) 前田勇編著『21世紀の観光学ー展望と課題ー』学文社、東京、pp.5-6 (2003)
- 6) 井口貢『まちづくり・観光と地域文化の創造』学文社、東京、pp.3-4 (2005)

(平成21年12月3日受理)